藤晩の2人

SPIRIT

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガルパン小説第２弾。とはいっても戯作中の戯作。

戦車道高校の親睦会で、島田愛里寿以外の８人の隊長が集まって交流会。

その中でお嬢様育ちのダージリンと西絹代が語り合うという話。

一応西ダジのつもりですが、恋愛的な描写はなく、趣味について語り合うだけ。しかも戦車についてはほとんど話題にならない。

目　次

藤晩の２人

「まだあげ初（そ）めし前髪の　林檎のもとに見えしとき
　前にさしたる花櫛（はなぐし）の　花ある君と思ひけり」
「祁山（ぎさん）悲秋の風更（ふ）けて　陣雲暗し五丈原（ごじょうげん）
　零露（れいろ）の文（あや）は繁くして　草枯れ馬は肥ゆれども」
　ダージリンと西絹代が同じ方向を向き、異なる詩を口にする。戦車道のライバル同士で親睦会を開き月見をしているのだが、十五夜の中光る白い満月がぼうっと輝き、静かな風が頬を刺激する。バックは星ひとつない紺色。視界には芒の穂がなびく。それがあまりにも趣深いため、気取って双方好きな詩を口ずさんだのであった。
「ダージリンさん。それは島崎藤村の『初恋』でありますか？」
「絹代さんが口ずさんでいるのは、土井晩翠の『星落秋風五丈原』よね」
　絹代とダージリンは顔を見合わせていう。
「ええ、私はとある文学館に行ってから、晩翠の詩がすごい気に入りまして。七五調の文体や、要所要所に歴史を感じさせる雰囲気がいいのですよ」
「でも、ちょっと男臭くない？　藤村の詩は流麗で女性的。同じく七五調の詩で、口に出しても読みやすいからいいのよ」
　ダージリンは例のごとく、取っ手付きの白いカップをもって紅茶をすする。絹代は渋染めの湯飲みに入った渋茶を一口含んだ。
　ブルーシートの後ろ、月から一番遠方で静かにカンテレを弾いていたミカは、こっそりと演奏をやめて椅子から立ち、両脚を動かして端っこに移動した。彼女は絹代が苦手なのだ。
「あの……絹代さん。ほしおつ……なに？　それに、なんで藤村と晩翠が出たわけ？」
「『星落秋風五丈原』。諸葛孔明こと諸葛亮の最期を詩にしたものだ。みほもお母様から、三国志は正史も演義も読むように言われていたはずだが」
「ご、ごめんお姉ちゃん……最近忘れていて」

おどおどと戸惑う西住みほに、姉のまほが例のりりしい声と落ち着いた雰囲気でいう。
（それにしても、優雅で品を好むダージリンと、突撃重視の絹代か。２人ともお嬢様育ちと聞くが、好みは正反対だな）
まほはふと、こう思った。
こういう時は私服でもいいはずだが、皆々それぞれの学校の制服。ダージリンは長髪を結った金髪に横浜の人間らしい青いブレザーに黒いミニスカート、黒ストッキング。絹代はやや開かれた胸元の襟付きの外套に黄色いミニスカート、腰までかかる黒髪も健在だ。
「まほさんも三国志には親しんでいるのですか。なんとも話が合う」絹代はさわやかに、にっこりという。「私も演義以来、張飛に非常に親近感がわいておりまして、彼のように生きたいと思っているのですよ」
「でも張飛って、酒豪で下品な感じがしない？」ダージリンが異議を唱えてきた。「私は同じ豪傑ならば関羽かな。冷静で理知的で、主君である劉備をかばって非業の死を遂げる」
みほは唖然としてしまった。嗜好が対照的なのもそうだが、何より――いささか遠いたとえではあるが――『エヴァンゲリオンで好きなヒロインは、アスカかレイか』のように２人が話しているからだ。
続いてダージリンが、
「晩翠も藤村も、それまでの俳句や短歌に代わる芸術『新体詩』の先駆者。２人が活躍した時代を『藤晩時代』というそうだけど。作風は違っていても、リズミカルな文書と題材がいいのよね」
「『吾輩は猫である』『坊ちゃん』の主人公の周りの人たちも、精神的娯楽として新体詩を作ることを求められていた。こうしてみると我々も、戦車以外にこういう話ができるのがいいかもしれない」
戦車道一辺倒のまほがこんな言を口にするのは珍しく、絹代もダージリンもちらりと顔を見合わせた。
「ま、戦車道が坊ちゃんの好きな食い道楽のような、品のない物質的娯楽とは思いたくはないけど」
「あ、でも、華さんのお母さんは戦車を油臭くて無粋なものと嫌ってま

したし」
　みほは苦笑いしながら言う。少し空気が白けたが、
「五十鈴のお母様は頑固なだけでありましょう」
　絹代は笑いながらいなした。
　りーりーと、鈴虫の音がかすかに聞こえ始めた。薄く黒い雲が白い満月をわずかに隠す。
「『丞相病篤かりき』か……」ふと、絹代は遠くの月を見ながら、「私も福田という名丞相がいなければチームを勝利に導けない『助けようのない阿斗』。この前のエキシビジョンマッチや大学選抜チームとの戦いで、つくづく痛感しました」
「お姉ちゃん、『阿斗』って」
「劉備の子劉禅で、蜀の二世皇帝な。先代に比べると暗君と言われていて、『阿斗に呆れる』という意味で『阿呆』という言が生まれたという話もある」
　みほはまた訳が分からず、姉にまた質問した。
「知波単は突撃が伝統的な美徳。それを変えるのは難しいものよ。こんな格言を知ってる？『一隻の軍艦を造るには三年、新しい伝統を築くには三百年かかる』」
「イギリスのアンドリュー・カニンガムですよね」
　はきはきと答える絹代に対し、ダージリンが落ち着いた声で話す。
「それに劉禅は二世皇帝としてはまだましな方。馬と鹿の区別がつかない二世皇帝もいたんだから」
　絹代はうなずいて、
「秦の胡亥ですよね。しかして『馬鹿』というとか」
「絹代さんはこんな言葉を知ってる？『白い糸は染められるままに何色にも変ずる』」
「『三国志』『魏志倭人伝』の作者である陳寿が言った言葉ですよね。『周りの人間が有能なら善く、悪かったら駄目になるような人間』という意味で」
「劉禅はそう評されていた。考えてみれば私自身も、戦車に乗ってる時こそ大きく構えているけど、オレンジペコやアッサムといった有能

な人に囲まれてやっていけるようなものねえ。
　アールグレイさんから隊長の座を引き継いだ当初は私も、『不肖の子』『凡将』と言われていたものよ。その中で自分の在り方を自覚して、私の足りないところをあの2人に引き継がせた」
「周りが有能な人だからこそ今の自分がある、ということでございますね。それは私も同じです。辻つじさんから隊長を引き継いだ身ではありますけど、突撃一辺倒で、『凡将』いや『愚将』なところがいまだに直ってない」
「有能な人材をどれだけ上に引き立てられるか、それが『将に将たる器』かどうかが試される時だと思うの。絹代さんは大学選抜チームとの戦いのとき、福田さんの意見を受け入れて善戦した。あなたは将に将たる器だと思うわ」
「ありがとうございます」
「その点はいい意味でダージリンも絹代も、関羽や張飛とは違っているのかもしれないな」まほが穏やかな声で答えた。「関羽も張飛も、自身の腕っぷしは強かったが、集団の中で人間関係を作ったり、配下を率いていくのには向かなかった。関羽は同僚に傲慢で、張飛は部下に横暴だった。結果的にそれが自分たちを破滅に導かせた」
「劉備に残ったのは諸葛亮だけだったから、痛ましい限りでござったでしょう。ぼちぼちこうして3人集まったのだから、私達3人で『桃園の誓い』やりませんかね？」
「やめてくれ、私たちはそんな間柄ではない」
「それに今は秋。明らかに季節外れでしょう」
　そっけなくまほにもダージリンにも断られ、
「ですよねー。あはははは……」
　声をあげて絹代は笑った。
　それでもみほは想像できてしまった。劉備の格好をしたまほ、関羽の格好をしたダージリン、張飛の格好をした絹代が、桜の花びらが舞う中で腕を組みあい、
「我ら天に誓う！」
「生まれた時は違えども！」

「死す時は同じ！」
と青空に向かって叫ぶ光景が。思わずぷーっと吹き出してしまった。当然3人の目が彼女に集中する。思わずそそくさと立ち去る羽目になった。
それを見送った後、再び月に向き合い、ダージリンは再び『初恋』の一説を口にした。
「やさしく白き手をのべて　林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に　人こひ初（そ）めしはじめなり」
「ひょっとして、ダージリンさん、恋をしてるのでありますか？」
するとダージリンは白い顔をぽっと赤く染めて目を背けてしまった。絹代は喉の奥で「え……」と声を出す。
「いえ……。でも、私の友達がすっごく熱い恋をしたのよね」
「友達が、ですか」
「当初その友人の思い人は別の人に恋をしてたんで、友人は自分が仲介する形で、その2人を突き合せた。でも、結局その人の思いをあきらめきれず、流れ流された結果、その思い人と男女の関係に至った」
「え……」絹代は呆然として、「それって『寝取った』ってことなんじゃあ……」
「『イギリス人は恋愛と戦争では手段を択ばない』とはよく言うけど、それを地で行く人なのよ。当初その人と付き合っていた人と犬猿の仲になってしまった」
「それで」いきり立つ絹代と違い、まほは冷静だ。「どうなったんだ？」
「曲折の果て、結局振られちゃった」
「そうでしたか。自分から災いのもとを作った人間ゆえ、当然なのかもしれませんね」
「そのことで多少荒れ狂ったこともあったけど、今は新しい恋が実って落ち着いているそうよ」ダージリンは、ほっと安どの表情を浮かべた。「恋も大事だけど、その人保育士を目指して勉強してるみたい。母子家庭だから、同じ境遇の子供たちに寂しい思いをさせたくないって」
「そうでしたか……」絹代はうなり、「なんか複雑な気分です。私は恋

愛したことがないし、もししてもドギマギするばかりだと思うけど。なんか罰とかないのかね、その子」
　するとダージリンが、敵意のあるとげとげしい目で絹代を見た。
「あ……すみません、そうですよね。ダージリンさんの友達でもあるんでしたよね、その子」
「いろいろあったんだろうが、立ち直っただけでも良かったんじゃないかな」まほが2人を仲裁してきた。「私たちは男っ気がないから、恋愛の本質なんて理解できようもないが、それができるのも若いうち」
「こんな言葉を知ってる？　『恋は盲目』」
　まほも絹代もうなずく。
（こうして横浜暮らしも長くなったけど、また会えるかしら……ワールドさん……）
　遠くにいる友人を思い出し、ダージリンは口ずさみ始めていた。
「『名も知らぬ　遠き島より』――」
「ダージリン、藤村の詩が好きなのはわかるが、『椰子の実』はちょっと季節外れであろう。新体詩にちなんだ秋の歌といえば」
「まほさんもわかりますか」
　絹代は感心したようにうなずき、その歌を先陣きって口ずさみ始め、続いてダージリンとまほが続いた。『荒城の月』の2番の節を。

　秋陣営の霜の色
　鳴き行く雁の数見せて
　植うる剣に照り沿いし
　昔の光今いずこ

「な、なんか話についていけない……」
　みほは椅子から立ってそそくさと後ずさり、ブルーシートの奥に逃げてしまった。
「ミホーシャ……あんた……戦車以外はからっきし……」
　8歳児ぐらいの少女（これでも高3）カチューシャが、みほをからかってくる。もっとも彼女も今までの話は全然訳が分からなかったらしく、あからさまにうつらうつらしているが。

「って、カチューシャさんも眠そうじゃ……」
「『，Ｏ　ｓｏｌｅ　ｍｉｏ　ｓｔａ，ｎｆｒｏｎｔｅ　ａ　ｔｅ（オーソーレーミーオ、スタンフロンテアテー）♪』。私はラブソングならこっちのほうが好きだな」
　団子を手でほおばりながら、アンチョビはカンツォーネの１節を高らかに歌う。
「アンチョビさん、それは……」
「知らないのか？　イタリアのカンツォーネの代表にしてラブソングの代表でもある『オー・ソレ・ミオ』。『私の太陽』という意味だ。『，Ｏ　ｓｏｌｅ，，ｏ　ｓｏｌｅ　ｍｉｏ（オーソーレー、オーソーレーミーオー）』♪」
　クラシックギターを抱えて歌い狂うアンチョビ。
「アンチョビがギターできるなんて、ちょっと驚きね。カチューシャもバラライカならちょっとできるかな」
　カチューシャの言葉を聞いて、みほの中に妙なイメージが浮かんだ。
　公園で相手の猫に背後から抱き着かれたボコられぐまのボコが「よかったのか、ホイホイついてきて」「俺はノ○ケだって食っちまうクマだぜ」「お前俺のケツの中でショ○ベンしろよ」と誘惑する姿がありありと浮かんだ。思わずぷっとなってしまう。
「ミホーシャ……。何がおかしいの？　私は大きく構える大将だから看過するけど、そうでなかったらシベリア送りよ」
「ごめんなさい、カチューシャさん。バラライカと聞いて『すごく大きいです』『お前俺のケツの中でショ○ベンしろよ』って思いだしちゃって」
「みほ……それ全然違うぞ」
「あははは……」苦笑いしながら、みほは「ところで、さっきから気になってたんですが、この椅子はいったいなんなんですか……こわい……」
　みほは先ほど座っていた椅子のデザインを見た。赤色で、円柱に半球を乗せたようなデザインだが、頭頂にぎろりとにらみを利かせてい

るような三白眼の目玉が２つついている。
「あれ、ミホ知らないの？　Ｗｈａｔ　ａ　ｓｕｒｐｒｉｓｅ！」大げさにケイが驚いてみせた。「岡本太郎の名作、『座ることを拒否するいす』よ！　椅子に目や顔を描いてさながら生き物のようにして、椅子と座る人間を対等にしようとして作られたの。もちろんサンダース校で作ったレプリカだけどね。中を空洞にしたから簡単に持ち運べるわ」
　ケイはそう言っていたずらっぽく笑い、木の容器に入っている緑の団子を一つつまんだ。彼女の座っている『座ることを拒否するいす』も、黄色い色につぶらな黒目が２つついているが、口は不規則な曲線を描き、ゆがんだ笑みを浮かべていた。
「こんな言葉を知ってるかな」アンチョビの歌に合わせてカンテレを弾いていたミカが、「『顔は瞬間瞬間の発見だ、どんなものにも顔がある、グラスの底に顔があったっていいじゃないか』」
「Ｏｈ！　岡本の名言よね!!　人間の顔を芸術の極みと見極める!!
言い方はダージリンっぽいけど、ミカもよく知ってるじゃない!!」
　ケイは感心しながらミカの首に抱き着く。スキンシップに慣れてないらしく、ミカの額から冷や汗が流れた。
「これもケイが用意したものよね」カチューシャは杉の机に置いてあるコップを取り出し、「これもオカモトタローの作品なんだっけ、可愛いじゃない」
「Ｙｅａｈ！」
　ニコニコしながらグラスの底を眺めるカチューシャを気にしつつ、みほは横からのぞき込む。以前テレビで見た『太陽の塔』によく似たむすっとした顔がそこに刻まれていた。
（可愛い……？　むしろ怖いじゃない……）
　多少どぎまぎしつつも、みほは先ほど自分が座っていた赤い椅子に刻まれた２つの目を見つめた。確かに感じさせられるものがある。
（みんなよくこの椅子に座って平然と月見できるよなあ。それとももしかして、芸術を解せない野暮天は私だけ……？）
　赤毛のアンほどではないが、自身になかなかの想像力があることも

気づかず、みほは落ち込んだ。

たわいもない、ばかばかしい会話をしながら、月見の夜は更けていく。

終わり

？